

招待講演

突然の視覚障害を乗り越えて
ヴァイオリニストへ

川 島 正 雄 (東京藝術大学管弦楽研究部)

<発 病>

23年前(1980年)小学3年の長男^{なりみち}成道は、夏休みに家内の両親と1週間のアメリカ旅行に出かけた。そして、最初の訪問地ロサンゼルスで思いがけず病に倒れ、入院を余儀なくされた。それは私達がそれまで聞いたこともなかった、スティーブソン・ジョンソン症候群で生存率5%と言われた。

それまで男の子3人、家内の5人家族で平穏な毎日を過ごしていた。それでも、その頃は世の中が大変忙しい時代で、ヴァイオリン弾きの職業柄、レコーディングは深夜にも及び、3日も子ども達とろくろく口も利いていないということもしばしばだった。が、漠然と子どもの将来を考え始めた頃でもあった。

そのような時であったので義母から電話の第1報を受けた時は突然、後ろからハンマーで殴られたような衝撃を覚えた。一夜にして、天国から地獄へ突き落とされた気持ちであったが、翌朝、家内は取る物も取り敢えずロスへ発って行った。

入院先のUCLA(南カリフォルニア大付属病院)で見たものは、これが何日か前にディズニーランドを楽しみに成田を出発した成道かと目を疑ったそう。もちろん、成道は意識もなかった。

<ススキ・ハル子さん>

入院は3か月近くに及んだ。その間、絶望の淵に立たされた家族を支えて下さった方々がいらした。その中でもUCLAで栄養士をしていらしたススキ・ハル子さんを私達は絶対、忘れることはできない。入院中、毎日何回も病室へ

顔を出して下さり、先生との通訳をして下さったり、病院のカフェテリアだけでは味気ないだろうと家族の者へ手料理を運んで来て下さった。また、成道が少し回復し、外を歩けるようになった時、それでも皮膚が元には戻っていないので、ダブダブの服や甚平を縫って来て下さった。なによりも異郷の地で絶望の淵に立たされていた4人には強い心の支えになった。

成道を「可愛相だ、なんとか助けたい」というハル子さんの「無障の愛」、またそれを心から感謝している母親と祖父母、それは成道が「人の心の優しさ」を知った初めての体験だった。幼ない子どもの体験は大きくなってからのそれよりもその後の人生へ大きな影響を残したと思う。現在、成道の音楽の中で大きなウェイトを占めているのは「優しさ・愛」である。

話は20年後にタイムスリップするが、2000年にロスへヴァイオリニストとして20年振りに戻り、コンサートを行うことができた。会場には当時、お世話になった病院の先生方や、見ず知らずでありながら大変お世話になった日系人の方々が見えていた。が、ハル子さんの姿はなかった。6年前に亡くなられていたのだ。コンサートの翌日、お墓にお参りしたが、お墓のプレートに奇しくも「マリアン・ハルコ・ススキ」と書かれてあった。前日、コンサートでアンコールの一番最後に弾いたのはグノー作曲「アヴェ・マリア」だった。クリスチャンネームがマリアンだったハル子さんに、成道の気持ちが通じたのかもしれない。

ハル子さんをはじめ、善意の方々の支えにより退院することができたが、後遺症として視覚障害を持つことになった。が、一時は覚悟を決めた私だったので、ホッと胸を撫でおろす思い

だった。

＜私と義父・家内＞

成道の発病以来、私はどうしていたかという
と、「子どもにとんでもない事をしてしまった。
アメリカ行きを止めなかったのは親の責任だ」、
と後悔の念に捉われていた。それまで「がむしゃ
らに前進する」という仕事人間の生き方が無意
味に思えて、思考も停止した状態だった。

一方、帰国した成道達の生活は一週間に3か所
の病院通いで、義父と家内はロスからの延長上
で、物事を手きばきとこなしていた。

＜成道の人生を挽回してやろう＞

たまに家内と成道の将来を話すことはあった
が、以前と違う子どもへ、親の方が気持ちを切り
換えられない状態だった。一年経った頃、い
よいよ本格的に考えようということになった。
小学4年も3学期に入ろうとする10歳の時だっ
た。

目を使わないもの、将棋も候補に挙がったが
最終的には成道が3歳の頃、私が家内からさん
ざん言われていたヴァイオリンをすることにな
った。と言っても成道の場合、視覚障害の為、
将来の職業としてオーケストラはできない。先
生も難しいかもしれない。残るは楽譜を見ない
で済むヴァイオリニスト、つまりソリストの道
しかない。しかし、ヴァイオリンを始める年齢
は普通3～4歳から、遅くとも6歳位までで、
10歳とはソリストを目指すにはあまりにも遅い
スタートである。が、親の責任と感じていた私
は「よし、これで成道の人生を挽回してやろ
う!」と、やっと巡って来た自分の出番に一人
奮い立ったのをハッキリ憶えている。

ヴァイオリンを始めたことで成道と家内には
「今日はここまでできた。明日はあそこを目指
して」と毎日の喜び、目標が、私には将来の目
標がそれぞれできた。それまで発病以来、止まっ
ていた我が家の歯車が、また前へ動き出した。

成道へのレッスンでは遅く始めた分を取り戻
す為に、私は全力投球をしようと決意した。「子
どもの楽しいヴァイオリンのおけいこ」ではな
く、まさに「ヴァイオリン道場」だった。小さ
な子どもには楽譜通りに弾けると「ハイ、よく

できました」と先に行くことが多いと思う、こ
こでは細かい楽器の持ち方、指の形、音楽的な
音の出し方等、ずっと後からするようなことを
初めからやったのである。なので練習時間も毎
日8～10時間となった。

楽譜はどうやって見ていたかという、中学
2年位まではほんの僅かだが視力があつたの
で、大きな模造紙に家内と私が極太のマジック
で音符を書き、それを壁にピンで止め、へばり
付くようにして弾いていた。1枚に1小節位の
こともあり、1曲では何百枚にもなった。この
頃、玄関に入るとマジックの匂いがしていた。
が、次第にそれも見えなくなり、その後は現在
と同じ方法であるが、初めに、私ならヴァイオ
リンで、家内ならピアノで、どちらかが弾いて
曲を覚え、それから本当の練習が始まるという
健常者と全く逆のやり方である。

例えばチャイコフスキーのコンツェルトの宿
題が出た時だった。1日目で暗譜（曲を暗記す
ること）させて後の6日間練習させる為、単純
に計算して1頁を30分で暗譜すると1楽章、15
頁を7時間半でできることになる。そこで私は
一方的に「1頁30分でやるぞ」と宣言してやら
せた。将来の為にも「生ぬるいやり方は知らな
いで欲しい」という気持ちだったので、あたか
もそれが当然のやり方のように振る舞ってやら
せた。

＜演奏の両輪＞

実際のレッスンの内容であるが、小さい頃か
らやっていて、気が付いたら何となく指が動い
ていた。というのが多い訳であるが、成道の場
合、遅く始めたのだから時間を短縮する為にも、
理論を理解しながら技術を身につけていこうと
いうやり方で押し通した。ここでは一つ一つの
技術をその場で確実に、身につけねばならない。
小さな子どもだから、と遠慮している時間の余
裕はなかったので、このようなやり方になった。
これは私の持っているすべてを成道に移す作業
でもあった。

まず、演奏には「技術」と「音楽性、つまり
感情」の両輪があるとハッキリ区分けして教え
るようにした。小学生の成道だったが頭の中に
しっかり分けて理解してくれることを願った。

<技術を叩き込む>

技術は客観的なもので奏法はいろいろあっても真理は一つである。力を抜いて自然な動きをすることである。更に考えを進めると、答えが決まっているものならば、技術に関しては強引にこちらからの一方通行で叩き込んで良いとも言える訳である。絶対に信じてやって欲しかったので、一分のスキもないよう論理立てて説明することに努めた。

細かい技術論に於て幸いなことがあった。それは私は何も考えず、さっと器用に弾けるタイプではなく、納得してから弾く方だったので、大学2年の時から始めていたことなのだが「技術の一つ一つを頭の中に箇条書きにしておこう」と決心して実行していた。そのような中で成道のアクシデントがあり、ヴァイオリンをやらせることになった。

親が戸惑っていたり、悩んでいたことが子どもには幸いになったのかもしれない。

<感情を育てる>

もう一つの車輪である感情はどのようにして育っていったかを考えてみたい。

御承知のように楽譜には音符以外にも強弱等、表情記号が記されてある。でもそれを忠実に弾いただけでは、平板ななんの感動もない演奏になってしまう。感情を多く持った人は楽譜に書いてあることを「手掛り」として自分の感情、個性で曲を創っていくのである。だから感情の襞を多く持っている人の方が面白い演奏になるのは当然である。

成道が障害を持った時、素人考えではあったのだが、視覚からの情報不足により片寄った人間にならないよう、できるだけ情報を与えようと考えた。食事の時、誰かれとなく新聞、テレビを声を出して読むのは我が家の習慣になっている。きれいな事だけでなく、三面記事的なものも感情の機微を知るのに役に立つ。それから親子では何か照れ臭いような事、愛とか恋とか、初めは抵抗があったが音楽の為とあらば言うようにした。今では我が家にはタブーもなく便利ではある。

レッスンではもっと直接、感情論を話さなければならぬ。そこで平面的な楽譜を立体的な

感情に持って行くステップとして、風景を頭の中に描かせたらどうだろうと思った。曲全体、または一部分のメロディに風景をイメージさせるのである。それも自然の風景と心の風景の二種類あった。

自然の風景では見たこともない、もちろん音楽の歴史と伝統を湛えたヨーロッパの風景であったし、心の風景では天国、或いは地の底に引き込まれる場面等もあった。これらは私が勝手に作り上げて説明したものだった。

このように風景を描いてやった方が小さな成道には、音符を感情の入った音楽に変えるのに、わかり易かっただろうと思っている。

その後も、このやり方は音楽作りの一つの方法として、習慣づいているはずである。頭で描いたものを演奏する、つまり、心に思い描いている風景を、ヴァイオリンで伝えようと訓練することによって、更に感情は育っていったのではないかと思う。

「技術は厳しく干渉するが、音楽性（感情）は豊かな感性が育つよう優しく見守る」が私の成道への接し方だった。「小さな子どもに無理をさせているのではないか」といつも思うのではあったが、「いや、これこそが成道の将来を創るのだ」と自分に言いきかせる毎日だった。

<成道と仕事の狭間で>

その厳しいレッスンに付き合っていた私はと言うと、夜、帰って食事を始めると家内が「ほら、二階へ行ったわよ」と言う。成道がレッスン室へ行ったと言うのである。それ以上のことは決して言わないのだが。食べているのが何か悪いような、済まないような気分になにだんだんくなってきて、さっさと済ませて二階へ行ったものだった。終りはいつも夜中の12時～1時で、それから自分の練習が始まるという日々だった。ふとんにボタンと背中が着いた時の感触が忘れられない。「あー、一日が終った!」そういう感じだった。

その頃、独身の後輩に「いいネ、君は、どこで野垂れ死にしてもいいから」と、つい言ってしまったことがあった。今だにその後輩に「あの頃、そう言っていましたよネ、大変なんだなーと思っていました」と言われるが……。絶対や

ってやるぞ、という気持ちでいるものの自分に自由がない、縛られているという気持ちになるのもしばしばだった。

私自身の問題では、成道に時間をとられてしまう為、当時は東京芸術大学オーケストラのコンサートマスターで、自分の演奏をもっと向上させたいという思いと成道との間で悩みも大きかった。

＜頑張りを支えたもの＞

一方、厳しい練習をこなしていた成道のことを考えてみたい。今、振り返ってみて、どうして遊びたい盛りの子どもが毎日、長時間の練習を頑張れたのだろうと思う時がある。それは、「今日はここまで弾けるようになった。明日はあそこを目指して頑張ろう」という喜びが毎日の練習の支えになり、頑張らせたのではないかと思う。また、私は大きな目標であるソリスト像を作れるような話もよくした。その時点では、遙か遠くのものだったが、毎日の生活の中にソリストという言葉の響きが身近かににあったという訳である。大きな目標を持つことは、ともすれば挫けそうになる家族にも、頑張る為には必要だった。つまり、小さな喜びと大きな目標で頑張れたように思う。

もう一つ、これは重要だと思うのだが、そこに到達するには大変な努力が要るのだという雰囲気家が家の中にあったことだと思う。会話や毎日のレッスンの中に否が応でもあったと思う。ソリストを目指しているからには当然の努力と本人も理解していたと思う。

私も6歳からヴァイオリンを始めた。夜遅くレッスンの帰り道、母親はいつも「この道はカーネギーホールへ繋^{つな}がっているのだよ」と言っていた。昨年、行くには行ったのだが成道のサポート役として行った。

私の母は目標を演奏家の憧れであるニューヨークのカーネギーホールとしっかり掲げてくれたのだが、もう一つの「そこには大変な努力をして行くのだよ」というのが欠けていた。母の場合は、音楽家ではないし漠然と夢を抱いていただけで、具体的にわからなかったのであろう。また、あの時代では当然だと思う。

＜底深く貼り付いたもの＞

成道に対して気を付けたことは、「障害を意識させないよう」また、「心を傷つける事がないよう」にだった。気を配りながらも私の頭の中には、ずっと底深く貼り付いたものがあった。「180度変わった自分の境遇をどう思っているのだろう」と。正面切って聞く勇氣もない。ただ、「人生を悲観しないで欲しい、人生には楽しい事も一杯あるのだよ」と内心、念ずるのみだった。

成道は毎日、8～10時間の練習をたんたんとこなしていた。それを見て、こちらには引け目がある分、何か「恐れ」にも似た気持ちを抱いていた。

最近、成道が取材等である事を言っていた。視覚障害はアイディンティティーの一つで、背が高いとか低いとかと同じ感覚である。その他、「障害を持ったことは決して良かったとは言えないが、それによってヴァイオリンをする事になり、今このように素晴らしい世界を持っている」とも言っている。それを聞いて永い間、貼りついていたものが少し薄らいだような気がした。

＜心のバランス＞

厳しいレッスンが続いていると、自分は「障害」と「厳しいレッスン」の為だけにこの世に生まれて来たのではないかと、思ってしまったようにも願った。

日曜の夕方等は、近くの大学のグラウンドに弟二人を連れて野球しに行ったりもした。成道が投げて弟達は球拾いをする役回りだった。普段、遊べないせいか、広いグラウンドで全身で楽しそうに遊んでいるのを見てホッとした。たまには家の周りを私が伴走してジョギングもやった。

スポーツは成道を毎日の苦しみから一時でも開放してくれる貴重な存在だった。成道との関わりで思い出すのは、まず「厳しいレッスン」その次が「スポーツ」である。

そして、この頃から私は「ヴァイオリン教師」と「父親」の二つの顔を意識するようになった。

<反抗期>

中学に入ると、レッスン中に変化が出てきた。何回やっても言う通りにしないのだ。「あー、とうとう来たか」という気持ちだった。が、この反抗期というのは「人の言う通りにはならないぞ」という自我の芽生えでもある。魅力のある演奏とは個性、つまり自我があるということだから、ソリストを目指すのなら人の言う通りになっているようではダメだ。

待ち望んでいた事ではあったが、その場になるとどうしても「あー、それはダメ！こういうふうにして！」と言ってしまい、こちらは成道より永くやっている、答えはわかっている、早く先へ行きたいからお父さんの言う通りにしなさいという態度になってしまうのだった。そうすると必らず失敗した。

強引に作り上げようとする愚、一步引く賢さは失敗を重ね、少しずつは覚えていったのだが、生身である者の悲しさ、頭で考えたようにはなかなか行動できず、反省の日々であった。

何回やっても、やってくれなかった所をもう一度、戻ってやってみたらその通りにやったというような事はしばしばだった。要するにわざとやらないで、つまり、反抗していたのである。

師匠としてやっているつもりでも、父親の立場でもある事を思い知らされる時だった。成道とのレッスンの私の最大のテーマは、この「自我と如何に折り合いをつけるか」だった。

<プラスαを引き出す>

逆に私の方もプロとして教えてはいても、つい「親」になってしまい、プロらしからぬ事を思ってみたりもした。「何かの拍子に急に上手くなってくれないものか」と夢みたいな事を。能力を超えたプラスαを望む訳である。

小学6年の発表会の前だった。同じようなメロディが何回も出てくる中の一音にヴィブラートのかかった良い音を私は欲しいと思った。ヴィブラートというのは左手を震わして音を響かせる事である。

初めは「ヴィブラート！」と言っていたが、次第に「そう！そう！そのヴィブラート」と言っていて、遂に最後には「おー、凄い！ナーナヴィ

ブラートだ！」と叫んだ。成道は家ではナーナと呼ばれていたもので、とっさに計算もあったのだが「お前にしか出さないヴィブラートだぞ」という気持ちを伝える為そう言った。その後もそう言う度に、今までしていなかったような良いヴィブラートをし始めた。

この時、ヴィブラートに俄然、自信を持ったと思う。ヴィブラートはヴァイオリンの命と言っても過言ではない位、重要である。ヴァイオリン全体の自信にも繋がっただろう。

この日以来、このセリフは実によく使った。この他、プライドをくすぐるというような事もやった。いずれにしても初めは本物でなくても、やっているうちに普通の事となり本物の実力になっていくのではないかと思う。

<挫折(1)ヴァイオリン>

自我の芽生えに少し遅れて挫折を思い知るようになった。これには二種類あった。

一つは、ヴァイオリンで良い結果が出ない時、果たしてこのままやっていって良いものかというものだった。その頃になると、ソリストになることは難しい事でそれをやらされている、という気持ちもあっただろう。

高校生の時だった。帰ってみると成道がレッスン室にうずくまっていた。家内に聞いたところ、今日レッスンで江藤先生（カーネギーホールで日本人で初めて演奏され、世界的に活躍された桐朋学園での先生）のイメージされる音が出せず叱られたそうだった。

本人に「どうした？」と声を掛けると「ソリストなんかなれない。このまま続けていてもしょうがない。お父さんはなれると思っているの」と言いだした。そして、ロスへ行かなければ良かった。そうしたらヴァイオリンをやらなくて済み、こんな悩みもなかったはずと、このような時は必らず8歳の時の出来事に繋がっていくのだった。

私は最初のレッスンで先生がおっしゃった「君を必らず一流のソリストにして見せる」という言葉を持ち出し「だから頑張ろう」と言い残し、一階のリビングに降りて行行った。

私と家内はテーブルを挟んだまま根本的な解決のできない無力さを感じながらじっと押し黙

ったままだった。「頑張ろうよ」と言った時、私には信念とか確信みたいな物はあったのだが、それを実証する事ができない。しかも、私自身にもその言葉は空虚に響いた。

二時間位経った頃、二階からヴァイオリンの音が聞こえてきた。私と家内は思わず目を合わせてニッコリして私はレッスンの為、二階へ上がって行った。

どうにもならない現状に爆発してしまった成道だったが、親にその時の自分の悩みを伝える事はできた。この時、成道の心のどこかに親からの「頑張ろうよ」の一言を期待するものがあったのではないだろうか。なぜなら将来の為、今、何をしなければならぬかは本人はもう、わかってきているはずだから。

本当にこれのくり返しだった。親は具体的に何もしてやれず、ただ「頑張ろうよ」の一言だけだったが、今ではあれで良かったのかも思っている。

<挫折-(2)目>

二つ目はやはり目の問題だった。日によって状態が変わり、調子の悪い時はぜんぜん見えなくなり、また、眩しいのでカーテンを閉めていた。

夕方、レッスンをしようと急いで帰ってみるとカーテンを閉めた真っ暗な部屋にうずくまっていた。張り切っていた気持ちと目の前の光景とのギャップに足元を^{すく}められる思いになるのも度々だった。

将来の為と努力してきた。これから、するだろう。それらを一挙に崩してしまう我々の前に立ちはだかる魔物に気力も萎えてしまいそうだった。

<留学>

大学卒業近くになって最大の挫折が訪れた。友人達は卒業後の進路も決まり、着々と準備をしていた。

成道の希望は留学である。でも一人では行けない。私は仕事があるので家内が付いて行くととなると、日本には私と弟達二人が残る。つまり家族離散だ。家族を犠牲にしてまで行かなければならないのか。でも、それ以外では自分の行

き場がない。どうして良いか、わからないという悩みだった。

その頃、桐朋大学より関東のある音楽教室の講師募集のハガキが来た。本人は「応募したい」と言った。何も確かなものがなく不安だったのだろう。私は「やりたければやっても良いが、もう少し勉強してからの方が良いのではないか」と答えた。一週間位考えている様子だったがその後何も言わなくなった。

留学について親戚は猛反対だった。「ここまで苦勞して来たではないか。これ以上見ていられない」というものだった。

第二人は「どうしてもと言うのならしょうがない」という意見だったが、私と家内は「絶対、留学すべきだ」だった。

それで江藤先生に御相談申し上げたところ、即座に「行かなきゃね」と言われ、「そこに住んで空気を吸うこと」ともおっしゃった。後でこの言葉の意味を実感するのだが、成道は先生の一言に気持ちも前向きになり悩みも晴れていた。そして、1994年8月、留学推進派はたった三人の中、成道と家内は王立音楽院留学の為、ロンドンへ旅立って行った。

<王立音楽院>

留学先の王立音楽院には、いろいろな国籍の友人達がいた。育った環境が違うので考え方も違う。同じ曲でも違う解釈になる。これを体験できたのは大きかった。

そして友人達の生き方も余裕のあるものだった。ピアノを持っていなくてもピアノ科で「とびきり優秀」という友人もいた。日本での「コンクールまっしぐら」の雰囲気とはぜんぜん違うものだった。

また、ヴァイオリンのレッスンでの事だったが、先生から注意を受けても技量のうまい、へたに関係なく自分の音楽の正当性を述べる、初めはびっくりしたそうだが、日本人には欠けた部分である「自分を主張する」という雰囲気に、成道も次第に「自分を出す演奏」へと変わっていった。江藤先生の「そこに住んで空気を吸うこと」の意味がよくわかった。

<親も遅しく>

話は留学前に戻る。あたふたと出発した二人だったが、家内が私の為に唯一しておいてくれた事があった。「わからない時はこれを見てね」と料理家の田村魚菜さんの料理大百科辞典を置いてくれていた。

大丈夫と送り出しはしたが、それまで一人住まいの経験がなく、内心、大いに不安だった。でもそのうち、生きる為には本と首っぴきで料理作りに励みもした。失敗もあったが得意な料理もできた。夜遅く帰ってから作る時など、何とも言えない悲哀を感じる時もあったが、今までになかった生き方を味わうこともできた。

ロンドンへ着いた当時の家内の苦勞も大変だったろう。何にしろ中学程度の英語で10軒の不動産屋を見て回り、現在のアパートの契約までしたのだから。最近では、成道が言うには下手な英語らしいのだが、いろいろな方と臆せず、大事な話も済ませているようだ。

成道だけでなく、家内も私も遅しくなれたのは留学のおかげなのかもしれない。

<帰らせろ！コール>

留学も三年も経つと親戚中から会う度に「もう、いい加減に帰らせたら」と言われるようになった。

ある時、杉並の実家に住んでいる三男から、話があるというので喫茶店で会うことになった。いろいろ話をした後、三男が「ところでロンドンの連中をもういい加減、帰らせたら」と言った。私は思わず「帰らさない。今、帰らせたら国家の損失だ！」と口走ってしまった。相手が自分の息子だと思って随分、大げさな事を言ってしまったが、私の気持ちは「石にかじりついてでも頑張る。ネバー・ギブアップ」だった。

<王立音楽院創立175周年記念コンサート>

1997年6月26日、王立音楽院の卒業式の前日、創立175周年記念コンサートが開かれた。そして、そのコンサートのソリストに成道が選ばれた。25年に一回開催されるビッグイベントなのに、それに巡り合えたのは大変な幸運だった。ヴァイオリンを始めてから初めての榮譽ある出

来事だった。

私もコンサートを聴く為、ロンドンへ行った。演奏を聴きながら、幾つもの試練を乗り越えて、ここまで成長してくれた事を自分の子どもではあっても、成道の頑張りに素直に感謝しなければと思った。

コンサートの後、夜が更けるのも忘れて三人で、ベーカー・ストリート駅近くの店で心ゆくまで、コーヒーとケーキで乾杯した。その時は今までの苦勞はぜんぜん話題に出てこなかった。

<一本の電話>

私は日本に帰り、また、元の家族離散の生活が始まっていたが、一か月位した頃、一本の電話があった。それは創立175周年記念コンサートの模様が、朝日新聞の「天声人語」に掲載されたのを見られた、日本フィルハーモニー交響楽団からのものだった。来年の3月27日にセントリーホールで小林研一郎さんの指揮でメンデルスゾーンのコンツェルトを共演し、それを日本デビューにしないかという有難いお話だった。

私はすぐロンドンへ電話した。もちろん二人は大変喜んだ。今までこの為にすべてやって来たのだから。

18年前、ロスから掛かった義母からの電話がトンネルの入口なら、これは成道、否、家族にとって長くて真っ暗なトンネルに出口をさし示す一条の光に思えた。

<日本デビュー>

1997年3月27日、本番演奏中の成道はプレッシャーを感じる余裕さえないようだった。消化していく一音一音は18年間のすべてを超えて、今、夢を握むのだという必死の音に思えた。

そして、私は拍手で我に返った。なにしろ25分間、私の指先はまるで私が演奏しているかのように、ずっと細かく痙攣していた。まばたきもできなかった。その間に握みかけたものを逃がしそうで。心の中でずっと「乗り越えろ！乗り越えろ！」と叫んでいた。私にとっては、それまでの人生で最高に中身の濃い25分間だったが、成道にとっても発病から18年の思いが凝縮

された時間だったろうと思う。

帰りに家内の実家に寄り、苦勞を掛けた両親ともども、長い道のりの末、漸く訪れたホッとした時間を過ごした。

成道は心の底から開放された笑顔に見えた。私も18年間、力みっぱなしだった肩からやっと力が抜けた気がした。

1997年3月27日は成道はもちろん、家族にとっても忘れることのできない日になった。

<結 び>

発病からデビューまでの18年間は、本当に長い、真っ暗な出口の見えないトンネルだった。

親戚や周囲には、私達は何かにとり憑かれて

いるように見えていただろうと思う。でも「何とか成道の人生の礎を作ってやりたい！そして、自分への自信を持たせたい！」という気持ちだった。これは父親の本能だったのかも知れない。

ヴァイオリンをすることになり、私の全能力を注ぎ込める状況になったのは幸いであった。

今は、成道がヴァオリンを始めた頃、私が思い描いていた「思いを伝えられるヴァイオリニスト」として70～80歳になってもステージで弾き続けてくれることを願っている。

そういう思いで毎日毎日やって来たのだから。今後もそれに向けて精進して欲しいと思っている。